

森は水の源(みなもと) 水は命(いのち)の源 川は命のつながり

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する木曾川・飛騨川・愛知用水の交流を

総会&“まちづくり”と“つながり”の木曾川上下流交流・連携の集い

☆12月7日(土)午後1時開場、1時半から「ソーネ・おおぞね」ホールで、みん・みんの会の第14回総会を開催します。会員の皆さん、ご参加ください。

☆続いて、午後2時30分前後から木曾川上下流交流・連携の集いを行います。

総会では①2023年度活動報告 ②2023年度会計報告(収支決算) ③「木曾川流域水源の里基金」の報告と今後の運用 ④2024年度活動計画 ⑤2024年度予算などを報告・提案します。

今回は午後2時30分前後から4時すぎまで、「まちづくり」と「つながり」をキーワードにして「暮らしとつながる木曾川・飛騨川・愛知用水の『水』」「木曾川上下流交流・連携」「都市部と農山村地域との流域交流や連携」「関係人口」を軸にして話し合います。



パネラーは海道清信さん(名城大学名誉教授)、田中憲二さん(元長久手市建設部長)、河崎典夫(みん・みんの会など)です。海道さんは2016年4月、30人の学生と共に木曾川源流の里・木祖村の間伐現場(写真)に出かけ、間伐から製材までの工程を木祖村の人に案内してもらい、交流を行いました。田中さんは長久手市の職員時に、上流の南木曾町と「水を通じた命の交流」として2006年に友好提携を結びました。また、田中さんは、職員になられた前に多摩でまちづくりを取り組んでこられた方です。河崎からは、地域での川や水をめぐる取り組みや子どもたちとの「生物多様性」「川は命のつながり」のやりとり、団地でのまちづくりなどを話して、皆さんと話し合いたいと願っています。よろしくお願いします。

今回の集いの中で、「被曝2世」である杉戸孝さん(4頁参照)から、来年がヒロシマ、ナガサキから80年になることに、「二度と戦争を起さない」「核廃絶」…の思いを語っていただく予定です。

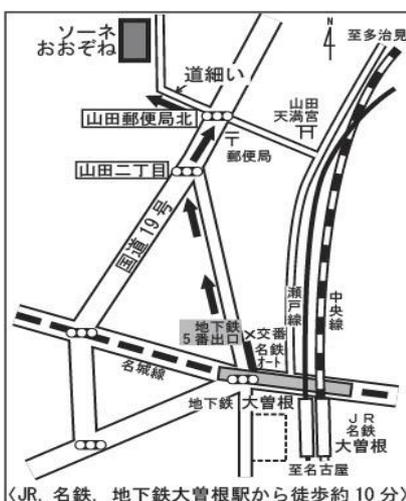
皆さんの参加をお願いします。

“強靱な小地域づくりは確かな未来戦略としても欠かせない” & “ごちゃまぜの効用”

全国町村会が発行している『町村週報』にコラム欄があり、「まちづくり」の視点として刺激的な文書が掲載されています。今回は「全面的崩壊を防ぐ強靱な小地域づくり」(『町村会報』2024年4月8日)と題する藤山浩氏(持続可能な地域社会総合研究所・所長)、「『ごちゃまぜ』の効用」(『町村会報』2024年4月15日)と題する小田切徳美氏を紹介します。

藤山氏は「地球温暖化は確実に進行し、生物多様性の喪失とも連動している。そして、戦争、紛争の激化は、世界的な食料やエネルギー供給に暗い影を投げかけている。そうした中、日本の経済力は低下し、農業の担い手は放置すると10年でほぼ半減する。恐ろしいことは、これらの持続性危機が結び付き、相互補完的に深刻化するサイクルが始まっていることだ。さらに日本では、能登半島地震をはるかに上回る規模の首都直下地震や南海トラフ地震が迫っている。…」

「これから必ず循環型社会へと進化する時代、強靱な小地域づくりは、非常時の対応だけでなく、確かな未来戦略



ソーネ・おおぞね
名古屋市北区山田町 2-11-62
大曾根住宅 1棟 1F
TEL:052-910-1001

としても欠かせない。今までの間違っただ『選択と集中』路線で切り捨てられてきた緑豊かな中山間地にこそ、強靱な小地域づくりを先行できる可能性は宿っている」と記述しています。

小田切氏は「…『ごちゃまぜ』は、各地で課題となっている関係人口の呼び込みを考えるときにも重要である。関係人口が地域住民とつながるときに必要な条件は、地域の中で世代が異なる住民やいろいろな職業の人々がまじり合っていることである。…今では、むしろ地域の中にあえてごちゃまぜの場を作ることが重要である。そのことにより、新しい価値が生まれ、そして活動や組織の持続性が保たれるからである」と述べています。

今年も今池まつりに参加～木曾の野菜などを販売～

9月15～16日(日、祝)名古屋市千種区の今池交差点を中心として今池まつりが開催され、大バザールに木曾広域連合とみん・みんの会でブース出店を行いました。天候の心配はありましたが、無事二日間取り組みができました。

朝早くから木曾広域連合の方々が木曾の野菜、大評判のトウモロコシ、「みん・みん楽作隊」も作付けし笹川さんが収穫出荷してくださった枝豆を搬入して、テント設営・販売準備。みん・みんの会も「木曾川流域図」、エコバッグ、ポストカード、味噌「みなみと」の販売準備に取り掛かりました。

折りしも温暖化の影響で多くに野菜の小売価格が上がっている中で、重たいキャベツや白菜はじめナス、トマト、キュウリなどが販売できました。

枝付きの枝豆を見て、「枝豆って、こうなっているんだ」と初めて見る姿に驚く親子連れ、「枝豆がそのまま大きくなると大豆になるの?」と納得していく人、「この地図、いいね」と説明を聞くまでもなく「木曾川流域図」を購入してくださった人、様々な人との出会いとなりました。

今年は厳しい猛暑の為か大豆の生育が遅れ今池まつりにギリギリ間に合いました。

笹川さんは、毎日大豆畑を見てさやの実入り状況にやきもきしながら枝豆の収穫してくださいました。感謝に絶えません。

今池まつりでの取り組みでの収益は、すべて「水源の里基金」に積み立てられます。(近藤)



発酵食品交流会—木曾町はじめ各地に根付く乳酸発酵食品—



10月16日(水)午前10時から「ウイंकあいち」会議室で、植物性乳酸菌について「名古屋生活クラブ」主催の発酵食品交流会に60人が参加して開かれました。「我が国に残る希少伝統発酵食品と微生物」をテーマに東京農業大学名誉教授で木曾町地域資源研究所長の岡田早苗氏が講演しました。

様々な乳酸菌、動物性よりも非常に強い植物性の乳酸菌について、そして全国各地に根付く乳酸発酵食品・文化が今も大切に息づいていること、特に木曾地域における「すんき」は塩を全

く使わない独特のもので、320 年以上前から綿々と続いているとのこと。その出典は松尾芭蕉の「奥の細道」に登場しているとのことなどが話されました。

講演では乳酸菌の学術的な内容にまで触れる専門的なレベルもあり、難解な部分もありました。また、「木曾町・小池糰店の玉づくり味噌の中に『長壽菌』と言われる『酪酸菌』が生きており、すごいことです」と力説されていました。

続いて、あいさつに立った小池糰店の唐沢さんは、毎年4月の第3土曜日に、七笑酒造、中善酒造と一緒に開催している「春の蔵開き」を通して木曾町の発酵文化を発信していることや木曾町にある「発酵食品振興条例」などについて熱く語りました。(近藤)

＜第17回木曾の手仕事市、9千人の賑わい～9月21、22日～＞

第17回「木曾の手仕事市」が140人程のクラフト作家が全国から出店して9月21、22日に行われました。近年は残暑が厳しいこともあり、今年は1週間遅い日程での開催でした。

不運にも22日(日)は台風の影響で大雨になってしまいました。しかし運も味方してか昼前には雨も上がり、ときたま晴れ間も出るほどまで天候も回復しました。こんな天候にもかかわらず延べ9,000人の方々が登場し、様々なクラフト作家の作品を手にとっていました。町中を大勢の方々が歩いている様子は、改めて「木曾の手仕事市」(写真)がこの時期のイベントとしてしっかりと定着していることを確認出来ました。

21日の18時からクラフト作家の人達との交流会もあり、やはり大盛り上がりでした。最後には「木曾踊り」を全員で踊り、1つの輪が出来たことへの喜びを感じられる夜でした。



継続していくことで仲間が増えて、木曾のファンも増えて木曾へ来る方も増える。このような1つ1つのことがとても喜びでもあり、大事なことだと感じられる2日間でした。(唐沢)

映画

「九十歳。何がめでたい」

2021年に99歳で亡くなった瀬戸内寂聴さんは、1922(大正11)年生まれ。本作の主人公である佐藤愛子さんは、翌1923(大正12)年生まれのちょうど100歳だ。お二人とも人生の達人であり、平和を愛する憧れのインテリゲンチヤである。

佐藤さんが2018年に出版したベストセラーエッセイ「九十歳。何がめでたい」(小学館)を映画化した本作は、歯に衣着せぬ物言いの「愛子節」が全開の痛快コメディである。

断筆宣言をした愛子先生(草笛光子)と、ちょっと古い価値観の中年編集者・吉川(唐沢寿明)の漫才コンビのようなやりとりは、お互いをリスペクトしていて気持ちがいい。

連載依頼を持ちかけられた愛子先生が「書けない、書かない、書きたくない!」と何度も断るものの、そんなことではへこたれない吉川は、先生の大好きな菓子折り片手に何度も家まで訪れる。

愛子先生がいくら断筆宣言をしても、先生の机を見れば「作家」であることに間違いはない。机の上はいつでも書ける状態が保たれているのだ。

「亀の甲より年の功」、年長者には若者には及ばない知恵や技能がある。編集者・吉川には、先生の辛口エッセイは絶対ウケるとの確信があったのだろう。迎合的な時代の「進歩」を怒

り、悩める若者を叱る。ものわりの「いい爺さん」になるのではなく、人生を楽しむ「面白い爺さんになれ」。

主演の草笛光子さんは、1933（昭和8）年生まれの90歳。美しさは相変わらずで、愛子先生への「人生で一番大切なことを一言でズバリとお願いします」との訳知り顔の質問に、ひとこと「知らん！」と答えるところなど、生き生きと演じている。

嬉しいのは大ヒットしている事だ。シニア層を中心に圧倒的な支持を集め、すでに動員80万人、興行収入10億円突破。90歳主演女優の映画としては史上初だそう。

この映画を観ていると、長生きしたくなってくること間違いない。（三田）

会員寄稿

日本被団協のノーベル平和賞受賞に寄せて

被爆から40年目の1985年、愛知県に住む女性被爆者の証言を集めた『原爆、忘れまじ』が発行された。生まれたばかりの愛友会（愛知県原水爆被害者の会）婦人部の女性たちが、県内をくまなく歩き「証言をテープに録音して文字起こし、語り手との間で内容の確認・修正作業を繰り返し」て、1991年までに計7冊の冊子が発行された。延べにして106人の女性たちの証言集である。この時、証言を集めた婦人部女性たちの多くは既に60歳を超えていた。そしてその後、発行に関わった女性たちも、また証言をした女性たちも、年々老い、ほとんどが亡くなっていった。



「被爆女性が力を合わせて作ったこの冊子を消滅させたくない」という願いから『忘れまじ』を残す試みが始まった。全国100名以上のクラウドファンディングへの協力によって資金目標を達成し、2022年の8月、この証言集『原爆忘れまじ』は完成した。この支援者の中には「みん・みんの会」の友人たちも多く含まれていた。

「いつの日か、私たちのなかで歴史の証人としての被爆者はいなくなるだろう。しかし、記憶を残すという強い文化と継続的な取り組みで、日本の新しい世代が被爆者の経験とメッセージを継承している。彼らは世界中の人々を刺激し、教育している。それによって彼らは、人類の平和な未来の前提条件である核のタブーを維持することに貢献している」—今回ノルウェー・ノーベル委員会が日本被団協にノーベル平和賞を授与した理由である。

「二度と被爆者を生まない」という想いで辛い被爆体験を語り続けた被爆者と、その被爆体験を継承するためのさまざまな人々の努力が少し報われたような気がする。

被爆者のもう一つの強い想いは「ノーモア・ウオー（二度と戦争を起こさない）」である。

（愛友会二世部会 杉戸孝）

<編集後記> 2024年の年末を迎えます。気候変動危機、あの猛暑のことが、皮膚感覚で残っています。地球に共に生きている動植物、続く戦争・「核」の危機、地震、豪雨、さまざまな災害で「地球の未来」はどうなっていくのでしょうか。「5年先、10年先は…!？」(K)

水源の里を守ろう 木曽川流域みん・みんの会

連絡先：〒464-0075 名古屋市千種区内山3-7-11

携帯電話：090-4150-6156（近藤） F A X : 0574 - 64 - 4747 mail:suigenosato@gmail.com